

土佐のわらべ

第419号《第441回（2016. 10. 13）子どもの本の読書会記録》参加者7人・文書参加3人

『不思議の国のアリス』 ルイス・キャロル/作 ジョン・テニエル/絵 脇 明子/訳 岩波書店 愛蔵版
『ふしぎの国のアリス』 ルイス・キャロル/作 生野 幸吉/訳 ジョン・テニエル/画 福音館書店

現代でも様々な場面で姿を見かけるアリスですが、出版されたのは約150年前。日本であれば江戸時代末期、幕末の激動の時代です。それなのに全く古さを感じさせず、多くの人々に愛されている少女アリス。これほど、時代や国、そして言葉を超えて人々を魅了し続けている少女は、なかなかいないように思います。

今月の読書会は、そんなアリスの世界、その魅力について語り合いました。

しかし、ウサギ穴に落ちこちて美しい庭に入っていないアリスのように、読書会に参加された皆さんは、読むのに悪戦苦闘されたようです。「両方読んだが辛かった。」「昔は楽しめたのに今回はついていけなかった。そんな自分の気持ちに驚いた。」「これほど有名なのに読了できたのは今回が初めて。」「以前、生野幸吉訳で2回読んだが理解できない・ついていけないというのが実状。今回はさらに読みにくかった。」等々。

読書会の先行きにも暗雲が立ち込めるかと思いきや、そこは皆さん自分なりに、アリスの世界との接点を模索されていました。

その鍵となったのはジョン・テニエルの挿絵でした。「分かりにくい部分を絵が助けてくれた」「絵があったから記憶に残った」「色のありなしそれぞれ良いが、自分は色付きが好き」「空想して読むなら白黒で十分かもしれない」「色付きの絵で衝撃を受けた。自分の思っていた色と違って」「絵に支えられた世界を、自分は楽しんでいたのでなと思った」等。挿絵が自分の中に本の世界を構築するうえでの大きな手がかりとなっていたのです。

2つめの鍵となったのは、この本に登場する摩訶不思議な登場人物と、いきものでした。どなたにもそれぞれ気になる人物やいきものがいたようです。

話題となったものをあげてみると「侯爵夫人」「卵を守るハトのお母さん」「ハリネズミ」「トカゲのビル」「チェシャ・ネコ」そして「アリス」がいました。

主人公のアリスについては、皆さん自分なりの印象を持たれています。「知らない世界でも堂々としている」「けっこう強い少女」「必死さの中にユーモアがあり、自分の内面と向き合う心の動きが独特」等。荒唐無稽な話をぐいぐい引っ張っていくには、強い存在力を放ちつつ、人の思惑を超え意表をついた登場人物やいきものが必要なのでしょう。

さらなる鍵は言葉です。日本で育った私たちには、言葉や文化で理解しにくい部分があります。そこが難しかったという声のある一方で、訳者の力や訳注に頼ってはいるが、随所にちりばめられている言葉遊びに興味をわいたとの声や、この言葉遊びがきっかけで英語を勉強したくなったという声もありました。

そして最後の鍵は物語の展開です。自分の知っていたはずの場面が、今回読んでみると違っていたり出てこなかったり…。知らず知らずのうちに身につけてしまった大人の常識が、全くと違っていいほど通用しない話の流れに、驚いたり戸惑ったりの連続だったようです。

このように、最後まで読もうと努力するのも読書会ならではの。「読んだつもり」「知っているつもり」の危うさに、思わず絶句した今月の本でした。

さあ、夏も過ぎ去って心地よい風の吹く秋です。今年の読書週間標語は「いざ、読書」。この機会に読んだつमोरの本を、もう一度手にとってみませんか。その時にはぜひ、物語の最後でアリスのお姉さんが思い描いていたように「大人になっても、愛にあふれた素朴な子どもの心を、失わずに」読んでみましょう。

(N.T)